

2024 年度

国府台女子学院 中学部

第 1 回入試

国 語 (50 分)

【注 意】

1. この問題は、「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
2. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
3. 印刷が不鮮明ふせんめいでわからない場合や、その他わからないことがあった場合には、
だまって手をあげ、先生にたずねてください。
4. 答えは、すべて解答用紙に記入してください。

注意Ⅱ句読点や記号もそれぞれ一字と数えます。

□ 次の各問題に答えなさい。

問一 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字の読みはひらがなで答えなさい。

- ① 集団行動においてドクダン専行はよくない。
- ② 学校の発展にチュウリヨクする。
- ③ イギヨウの姿で現れる。
- ④ 誰もがみなイチヨウに下を向いてスマホを見ている。
- ⑤ 社長を筆頭に、この会社は千葉県出身の人が多い。

問二 次の詩中の□にあてはまる生き物をひらがなで答えなさい。(出題の都合上、本文の仮名遣いを直しています。)

ぴんとつのがはれば雨がふり、
つのがかくれるとおてんきになる、
せなかのからには雲のえがかいてあった、
にじのような色もあった、
雨のことならなんでも知っている
おてんき博士だ、
一日どこというあてもなく
ぶらぶら
牛のような顔をしてあるいている。
あるいたところをまたもどってくる、
つの出せ ※ 妙妙の□

※ 妙妙(みょうみょう)：…非常にすぐれているさま。

(室生犀星「動物詩集」より)

問三 次のア～エの文のうち、「きまりが悪い」の使い方が適切ではないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 約束の時間に自分だけが遅刻してしまいきまりが悪い。
- イ 話の途中で眠気に襲われていたのを指摘されきまりが悪い。
- ウ 初めて同じクラスになる同級生との相性はきまりが悪い。
- エ 久しぶりに会った友人の名前を忘れてしまつてきまりが悪い。

問四 日本語の「さようなら」の語源は「さようならば」であり、この意味をわかりやすく言う「それならば」となります。つまり、日本語の「さようなら」は「それならば、〜」というように、未来に言動をつないでいく、とても前向きな意味合いがあったのです。これらの説明をふまえて、次のア～エの方言のうち、「さようなら」の意味につながるものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア シャつけえ
- イ おまつとさん
- ウ おみよーにち
- エ みやましー

問五 次の意味をもつ色を漢字一字で答えなさい。

若い、未熟な

問六 九月九日は重陽の節句といい、菊の花を飾る習慣がありますが、それ

にちなんだ慣用句に「十日の菊」というものがあります。この言葉の意味することを想像しながら、これと同じ意味で使われる次の言葉の()に当てはまる語を漢数字一字で答えなさい。

() 日の菖蒲あやめ

問七 次の山に関することばのうち、「春」の季語はどれか。次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 山眠るやまねむ イ 山笑う ウ 山粧うやまよそお エ 山滴るやましたた

問八 スパイを意味する「間者」「間諜」という語があります。「すきをねらう」という意味を含むこれらの言葉から「間」の意味を想像し「う○○う」と読む場合、○の中にはどんな言葉が入りますか。○ひとつにつきひらがな一字で答えなさい。

問九 「噴飯もの」「噴飯に堪えない」というときの「噴」には「ふく・はく」という意味がありますが、この「噴飯」の感情に一番関係の深いものは次のうちどれですか。次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 喜ぶ イ 笑う ウ 怒る
エ 悲しむ オ 驚く

問十 次の語を用いた慣用表現に共通して使われる動作を、ひらがな二字で答えなさい。

あきらめ 目鼻 察し

問十一 「まごまご」という言葉を使って二十字以上三十字以内で短文を作りなさい。話を通じれば主語がなくてもかまいません。

③ 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

※長文読解の解答に、常用漢字以外の漢字を使用することもあります。本文中の漢字をよく見て解答すること。

山奥で道に迷い途方にくれた都会のハンターたちは、そこに現れた「西洋料理店 山猫軒」という看板のある家に入る。「注文の多い料理店ですからここはご承知ください」という注意書きを、二人は、①、
ということだと思ひこむ。次から次に現れる扉の上の指示にひとつずつ従っていくうちに、二人はやがて、最後の、「からだ中に、壺の中の塩をたくさんよくもみ込んでください」というのを読んで、ようやく、「どうもおかし いぜ」と気づき始める。そして、注意書きはすべて二人を料理して食べるための下準備であり、そのために山猫たちがつけた「注文」だったのだ、と知る。あまりの恐ろしさにガタガタと震え、泣き出した二人の顔は②、
しわくちゃに。

結局、二人はあわやというところで猟犬や本物の猟師に命を助けられて、東京に帰る。しかし一度しわだらけになった顔は、もうそれっきり元には戻らなかつた、というお話。

③ 何度読んでも、ゾクツとさせられる。「西洋料理店」とは、「客に西洋料理を食べさせる店」ではなく、「客を西洋料理にして食べる店」だったわけだ。その意味では、「西洋料理店」という看板に偽りがあつたわけではないし、「注文が多い」というただし書きにしても、それジタイは嘘ではなかつた。

二人の解釈が間違っていたのだが、たぶん他の人だって同じように考えただろう。そこが怖いところだ。狩猟と言えば、人間が動物を殺すことであり、料理と言えば人間が他の生きものを料理することであり、注文と言えば、人間が自然界に対してつけるものだと、ぼくたちは考える。そして、もしかしたら、その逆がありうるかもしれない、と想像してみることはまずない。

人間↓動物、人間↓人間以外の生きもの、人間↓自然界。こんなふうには、いつだって、矢印は人間から他のものへと、一方に向いている。働きかける側（主体）はいつも人間で、相手はいつも働きかけを受ける側（客体）だ。矢印が逆を向く可能性に、ぼくたちがなかなか気づかないとすれば、それはなぜなのだろうか？

それは、「人間」と「他のもの」の間に、暗黙のうちに上下関係が想定されているからだろう。矢印が上から下へと向いているのは、水が上から下へと流れるのと同じように、当たりまえのことだ、とぼくたちは思いこんでいるようだ。

狩猟に関する賢治の話に、「氷河鼠の毛皮」がある。

厚い毛皮の防寒具をまとった乗客たちが、イーハトヴ発「最大急行ベリーグ行」で旅行中、仮面やマフラーで素顔をかくした白熊などの野生動物たちの襲撃を受ける、という物語だ。

襲撃者たちのねらいは乗客の一人、大富豪のタイチ。彼はふだんの冬の服装の上に、ラッコの毛皮を裏地にした内外套、ビーバーの毛皮の中外套、表も裏も黒キツネの毛皮でできた外外套などを着込み、おまけに上着は、四百五十四分の氷河鼠の首の部分の毛皮だけでつくられている。今回列車に乗ったのは、「黒キツネの毛皮九百枚をもち帰ってきてみせる」という賭けをしてしまったからだという。自分の富をひけらかし、酒を飲んで他の乗客

にからむタイチのまるで「馬鹿げた大きな子供の酔いどれ」みたいな態度に、みんな、腹をたてたり、呆れたりしていたのだった。

告発を受けたタイチが襲撃者によって外へとまさに連れ出されようとするとき、乗客の船乗りらしい青年が襲撃者の一人からピストルを奪い、逆に人質にとつて、その仲間たちにこう叫ぶ。

おい、熊ども。きさまらのしたことは尤もだ。けれどもなおれたちだって仕方ない。生きているにはきものも着なけあいなんだ。おまえたちが魚をとるようなもんだぜ。けれどもあんまり無法なことはこれから気を付けるように云うから今度はゆるしてくれ。

最後はあつけない。タイチと人質は解放され、襲撃者たちはみな降りて、列車はまた動き出す。「今度はゆるしてくれ」という船乗りの青年の要求があつさり受け入れられたのは、なぜか。それは青年の言葉が、相手にとって説得性をもっていたからだろう。このことについて考えてみよう。

作者の賢治は、まず青年の言葉を通じて、「きさまらのしたことは尤もだ」と、襲撃者たちのドウキを肯定してみせる。だが同時に、人間が毛皮をとるのは、熊が魚をとつて食べるのと同じように、生きものとして「仕方ない」ことだと言う。その上で青年は、「あんまり無法なこと」をこれからはしないようにすると言う。ある程度はしかたがないが、あまりひどいことはつつしむ、というわけだ。それは青年が自分のことを言っているようでもあり、タイチの代わりに言っているようでもある。またそれは、人間を代表して言っているようにも聞こえる。

つまり、人間として、生きていくために必要な範囲を、大きく越えるようなことはしないようにする。もっと言えば、生きものの世界に本来あるべき

「法」に背かないように生きるようにする、ということだろう。そうすることで、人間と動物との間になるべくフェアで、公正な関係をつくり、保つていかなければならない。前にも見たように、これこそが、狩猟社会をはじめとする多くの伝統社会が、神話や伝説や昔話を通じて伝えてきたメッセージでもある。

「氷河鼠の毛皮」をとりあげて、人類学者の中沢新一が「圧倒的な非対称」と題する文章を書いたことがある。そこで中沢は、あの物語の中の野生動物たちによる襲撃を、人間たちに対する一種の「テロ」として見る。彼によると、作者の賢治は、こうした「テロ」を引き起こす原因として、人間界が野生動物に強いてきた極端な不公平——それを中沢は「圧倒的な非対称」と呼ぶ——があると指摘したのだ。

この文章を中沢が書いたのは、二〇〇一年のニューヨーク同時多発テロとそれに続く対テロ戦争、そして狂牛病によって世界中に不安が渦巻いていた時のこと。中沢が言うには、テロも狂牛病も同じ原因から生まれる。つまり、どちらも「圧倒的な非対称」が生みだした病気なのだ、と。

現代世界は「貧しい世界」と「富んだ世界」に、弱者と強者に、敗者と勝者に引き裂かれ、その富と力のカクサはますます大きく、圧倒的なものになりつつある。またこれと並んで、人間界と動物界の間も、これまでは保たれていたはずの微妙なバランスが崩れて、「支配・被支配」の関係が、ますます一方的で、暴力的で、無慈悲なものとなっている。

中沢によると、世界を荒廃に導くこのふたつの「圧倒的な非対称」は偶然生まれたわけではない。どちらも現代文明にもともとそなわっている性質が表れたもので、互いに切っても切れない関係にある。

しかし、と彼は言う。かつて、人間界と動物界の間のカクサや不公正が大きくなくなりすぎないようにしてきた社会——それを対称性社会と呼ぶ——が世

界中あちこちにあったし、今もまだわずかに残っている。そこに注目しよう。そして、「対称性社会の住人ならば、これをどんなふうにも思考して解決に導こうとするだろうか」と考えてみる」ことだ、と。

「対称性」という言葉で思い出すのは、^⑦ 猟師と動物とのやりとりを描いた賢治の作品「なめとこ山の熊」だ。少し長くなるが、あらすじを書き出したい。熊とり名人の小十郎は、原生の森をのし歩いては、熊を撃ち、その毛皮と胆のう（それを干した「くまのい」は漢方薬として珍重される）をとって、セイケイをたてていた。そんな彼に、しかし、なぜか、なめとこ山周辺の熊たちは好感をもっているのだと、語り手（賢治）は言う。そして小十郎の方でも、「もう熊のことはだつてわかるような気がした」と。

例えば小十郎は、撃ち殺したばかりの熊のそばに寄ってきてこう言う。「熊、おれはてまえを憎くて殺したのでねえんだぞ」

^⑧、本当は他の仕事をしたいのだが、農業も林業もできず、しかたなく、熊とりをしているのだと語りかける。

早春のある日、熊の母子に出会った時のこと。

「まるでその二疋の熊のからだから後光が射すように思えてまるで釘付けになったように立ちどまってそっちを見つめていた」

^⑧、しばらく熊の母子の会話に耳を傾けた後、小十郎は「音をたてないようにこっそりこっそり戻りはじめ」、結局、撃たずにすませる。

語り手は、町に毛皮とくまのいを売りにいく時に小十郎が感じるみじめさについても語る。商人たちは、危険な仕事はしなくせに、猟師の足もとをみて、ひどい安値で買ったたく。

ある時、小十郎が熊をもう少しで撃つところで、その熊が両手をあげて叫ぶ。「おまえは何がほしくておれを殺すんだ」

そう言われてみると、彼には熊を殺すだけのしつかりとした理由がないように思える。食べ物を買う金のために熊をとるのだが、その金がなくても、山にあるどんぐりなどを食って生きていく方がいいような気もする、そしてそれだとえ死ぬことになってもいいような気がする、と彼は熊にうちあける。

すると熊は、自分も死ぬのはかまわないのだが、少し残した仕事もあるの
で、もう二年ばかり待ってくれないか、と小十郎に頼む。

それからちょうど二年目、自分の家の前で、あの時の熊が倒れているのを見て、小十郎は「思わず拜むようにした」。

最後に、小十郎は熊撃ちの最中に死ぬ。意識が遠のく中で、彼は熊の言葉を聞いた。

「おお小十郎おまえを殺すつもりはなかった。」

……そしてちらちら青い星のような光がそこいら一面に見えた。

「これが死んだしるしだ。死ぬとき見る火だ。熊ども、ゆるせよ。」と

小十郎は思った。

それから三日目の晩のこと、凍りついた小十郎の死体のそばで、熊たちが雪の上に輪になり、ひれ伏して祈っていた。

小十郎の顔はまるで生きてるときのように冴え冴えして何か笑っているようにさえ見えたのだ。

この物語は、その前の「注文の多い料理店」「氷河鼠の毛皮」に比べてどうだろう。前のふたつが、文明と野生との間の非対称を少し大げさに戯画化して描いていたのに対して、ここでは、小十郎と熊たちとの間に成り立って

いる、敵対的であると同時に親密な関係を、リアルに描いている。

前のふたつの話に出てくる、都会の紳士たちと山猫、タイチと寒い地方の動物たちとの関係は、ここでは、小十郎から毛皮などを買う **A** と **B** との関係にあたる。その間に立っているのが **C** だ。

そう言えば、小十郎と商人とがやり合う場面で、語り手の賢治はこう言っていた。

日本では……狐は狐師に負け、狐師は旦那に負けるときまっている。ここでは熊は小十郎にやられ小十郎が旦那にやられる。旦那は町の人の中にいるからなかなか熊に食われない。

ここで「旦那」と呼ばれる町の商人は、最後に熊にも「やられる」小十郎と対比されている。小十郎が、「やったり、やられたり」という連鎖の中にいるのに対して、商人だけは「食われない」、そして「負けない」。それはまるで、すべての生きものたちが「食べたり、食べられたり」という関係でつながっている「食物連鎖」の輪の中から、人間だけをジョガイしている文明のあり方を象徴しているかのようだ。

金という権力をふりかざす商人が、小十郎にみじめな思いをさせる場面を描くのは、「実にしゃくにさわってたまらない」と、書き手としての賢治はぼやいている。そして、「こないやなずるいやつら」は、世界がだんだん進歩していけば、ひとりで消えてなくなっていくにちがいない、とつぶやいて自分をなぐさめる。

それから百年後、「こないやなずるいやつら」は消えてなくなるところか、ますます世界に増え続けているのではないか。そして、強い者はますます強く、弱い者はますます弱くなっているようにぼくには見えるのだが、この様

子を賢治が見たらなんて言うだろう!?

それはともかく、この物語の肝心なところは、小十郎のその「みじめさ」であり、「かなしさ」だ。熊を殺す立場にある小十郎だが、彼が生きていたのは、熊たちにごく近い場所。彼もまた中沢の言う「対称性社会の住人」なのだ。

小十郎と熊たちは互いの「弱さ」を通じて、コミュニケーションをはかり、理解し合い、つながる。そして彼らはともに、商人に代表される「強さ」の都市文明から遠く隔てられている。

(辻信一著『弱虫でいいんだよ』ちくまプリマー新書)

* 狂牛病：家畜である牛に異常プリオン（感染性蛋白質）で汚染された肉骨粉を食べさせたことよって生まれた伝染病。多くの牛が死に至り、人間にも感染する可能性があるということ。世界はパニックになった。

問一 —— 線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ① に入る言葉として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア メニューの種類が多く、客が注文するのに時間がかかる
- イ 高級料理店なので、最高級の食材を求めるための注文が多い
- ウ 客と一緒に料理を作り上げるため、客への注文が多い
- エ はやっている店なので注文が多く、料理が出てくるまで時間がかかる

問三 ② に入る言葉として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア とんかつの衣みたいに
- イ ガラスみたいに
- ウ 紙くずみたいに
- エ 生クリームみたいに

問四 —— 線部③「何度読んでも、ゾクツとさせられる」とありますが、その理由について次のように説明しました。() に適切な語句をそれぞれの指定字数に合わせて本文中から書きぬきなさい。ただし(ア)に関してははじめと終わりの五字を答えること。句読点や記号なども一字と数えます。

(ア 16字)であることを(イ 8字)と考えてきた私たちは、そうではない状況について想定したことがなかったから。

問五 —— 線部④「賢治」とありますが、次のうち宮沢賢治の作品ではないものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア オツベルと象
- イ 風の又三郎
- ウ 河童
- エ 銀鉄道の夜
- オ 春と修羅

問六 —— 線部⑤「説得性をもっていた」とありますが、襲撃した野生動物たちはどのような内容に納得したのでしょうか。「くこと」につながるように、それについて最も端的に述べた部分を本文中から三十字以上三十五字以内で探し、そのはじめと終わりの八字を書きぬきなさい。

問七 ——線部⑥「テロも狂牛病も同じ原因から生まれる。つまり、どちらも『圧倒的な非対称』が生み出した病気なのだ、と。」について

I これはどういうことを説明したものとして最も適当なものを次のア～エより一つ選び、記号で答えなさい。

ア テロも狂牛病も、一見公平な関係に見せかけて、実は力関係に不公平感がある関係から生まれたものということ。

イ テロも狂牛病も、人間が生物として無法ともいえる行為をし続け、必要以上に弱者を虐げた結果生まれたものということ。

ウ テロも狂牛病も、力のないもの同士が協力し合うことで、自分たちを抑圧するものに勝とうとして生まれたものということ。

エ テロも狂牛病も、人間と動物の間になるべくフェアで公正な関係を作り、それを保とうとして生まれたものということ。

II 「非対称」を簡潔に言い換えた言葉を本文中から三字で書きぬきなさい。

問八 ——線部⑦「猟師と動物のやりとりを描いた賢治の作品『なめとこ山の熊』とありますが、この作品で描かれる内容に関する説明として明らかにあてはまらないものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 熊の言葉すらわかるような気がするという小十郎の態度は、熊の命とともに自らの命があることを実感しているからこそ生まれたものであり、原生の森に共生するものとしての交流のあかしである。

イ 小十郎が熊の母子のからだから後光が射すように思えて釘付けになったのは、その熊の母子に、人間に対するもの以上の深い愛情と限

りない敬意を感じて、その神々しさに圧倒されたあかしである。

ウ 小十郎に殺されるのを二年間待つてほしいと頼んだ熊が、二年後に小十郎の家の前で倒れていたのは、生活のためにやむを得ず狩猟をしている彼の立場や思いをくみとり、通じ合ったあかしである。

エ 熊撃ちの際に死んだ小十郎の顔が何か笑っているようにさえ見えたのは、周囲にひれ伏す熊の感謝の祈りが届いたからであり、ついに熊たちの属する世界に足を踏み入れられた喜びのあかしである。

オ 小十郎は熊たちに申し訳ない気持ちを感じながらも、熊撃ちに精通し、その熊の体の一部を売ることで生活していたが、それをやめなかったのは彼がその自覚をもって熊撃ちをしていたあかしである。

問九 ⑧に共通して入る語として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア すると イ しかし ウ つまり

エ では オ そして

問十 A Cに入る適語を文中より三字程度でそれぞれぬき出して答えなさい。

問十一 ——線部⑨「強い者はますます強く、弱い者はますます弱くなっていく」とありますが、このようになることで、現実の世界はどのようになっていくと考えられますか。次の形式に合う、漢字二字の語を本文中から書きぬきなさい。

現実の世界は、さらに（ ）（ ）していくと考えられる。

問十二 この文章を読んで感じたことを具体的な事例を含みながら、複数の生徒が話し合いました。A～Eの意見のうち、この文章で述べられている筆者の思いからは想定できない内容のものを一つ選び、記号で答えなさい。

A 私はこの文章を読んで、すぐにSDGsについて考えたわ。自分たちの利益ばかりを求める人間の活動によって絶滅、または絶滅に追いやられそうになっている動物たちはまさに被支配者だと思う。持続可能な社会であり続けるためにもそんな動物たちと共生していけるような豊かな社会にしていかなきゃいけないわね。

B そうだね。でも被支配者は動物だけにかぎらないよね。貧困ビジネスのように、貧しい人を利用してお金を儲けようとしていたり、貧しい国の人を安い賃金で働かせたりしている実態があるのは本当に悲しい。でもこうした動きをフェアに倫理的に正そうという企業もたくさん出てきていて、とってもいいことだと思う。

C 私はこの文章の中の「神話や伝説や昔話を通じて伝えてきたメッセージ」というところを読んで、昔話を思い出してみたわ。確かに昔話には自然や動物と人間が交流するものが多いし、自然との共生を心に刻むメッセージがあったんだと気づいた。こういうものをばかにしないで、動物や自然に感謝する気持ちを持ちたいわ。

D なんているか、社会から「優しい気持ち」がだんだん無くなっているよね。生産性がないとか、マイノリティだとかいって、そういう人たちを差別したり、生きづらくさせている残念な社会。でもだからこそ、そういう人たちだけでつながりあって、心穏やかに暮らせる社会のしくみができたらいいのと思うわ。

E でも現代の私たちは実際には文明の中で暮らしているのよね。そし

てその文明を築いてきたのは明らかに人間なのよ。強い人間は現代文明と相性がよくて、そうでないものからの搾取によって成り立ってきた側面があることも確か。でも強いものは普通に町の中にいるわけだから、本当に困っちゃうわね。

